働きの中に神様を見る

早いもので、1 月も最後の主日になりました。振り返ってみれば、今月は 1 日早々に能登半島で大きな地震がありまして、たくさんの人が犠牲になり、今も大勢の人が困難の中に置かれています。さらに 2 日には羽田空港で大きな事故がありました。痛ましい災害、事故で新しい年がスタートした、そんな印象です。能登半島大地震につきましては教会でも 7 日から受付に募金箱を設置して、支援を行っています。私たちにできることは微力かもしれませんが、それでも自分たちにできるだけの支援を教会として行っていきたいと考えています。今日はそうした一か月の中で考えさせられたことをお話しいたしましょう。

さて、先程お読みいただいたのはマルコによる福音書 1 : 9〜11 です。これはイエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた時のお話に他なりません。この直前の箇所、1 : 1〜8 には、洗礼者ヨハネがイエス様よりも先に来て、イエス様のために道を備える人物として、ヨルダン川で人々に悔い改めの洗礼を授けていたということが記されています。イエス様はこれから御自分の公の活動を始めていくにあたって、まずは洗礼者ヨハネからこの洗礼をお受けになったのでした。では、多くの方が問題にしていることですが、イエス様はなぜ洗礼者ヨハネから悔い改めの洗礼などお受けになられたのでしょうか。

イエス様が実は罪を持っていて、悔い改めることを必要としていたというわけではもちろんありません。この問題を解決するためには、洗礼者ヨハネが授けていた洗礼がどのような性格のものだったのかを知る必要があるでしょう。

J. ロロフという新約聖書学者は、洗礼者ヨハネが授けていた悔い改めの洗礼について、そこには「溺死する」という意味合いが込められていたと語り、「それは和らげられた形での来たるべき裁きの先取りであった」と述べています。つまり、分かりやすく言うと、洗礼者ヨハネの洗礼には、今罪を悔い改めて、溺死するという裁きを受け

た者は、もう裁きが済んだということで来たるべき裁きを免れることができるという、そのような意味合いが込められていたというのです。

このように、洗礼者ヨハネの洗礼が、来たるべき裁きを先取りして罪の赦しを得るという性格のものであったとすると、私はイエス様にとってこの洗礼を受けるということは、何の罪も持たない自分が、すべての人々が終末において受けなければならない裁きを今のこの世ですべて引き受ける、そうして皆に罪の赦しを得させるという苦難に満ちた犠牲愛の業をこれから行っていく上での決意表明だったのではないかと思うのです。そして、イエス様が洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになり、このような決意を表明された時、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という神様の御声が天から聞こえてきたのでした。

福音書にはこれ以降、イエス様が公生涯と呼ばれる公の生涯を始められ、この神様の愛の御声に支えられて御自分の愛の御業を行っていく様子が描かれています。今回、こうした福音書を改めて読み直しまして思わされたことがあります。それは、神様は存在なのか、働きなのかということです。

クリスマスの出来事、それは神様が人となられて、私たちの救いのために人間の罪の現場、苦しみの現場のただ中に駆け寄って来られた出来事に他なりません。そして、人となられた神様、イエス・キリストは十字架に至るまで人々の罪の現場、苦しみの現場のただ中で働かれました。そして復活の出来事を通して、私たちの死を滅ぼし、すべての人の救いを成し遂げてくださったのです。イエス・キリストを通して、私たちは神様がただ天高くいまして、私たちを冷たく見下ろしておられる方ではないことが分かります。神様は私たちのもとにまで降りて来られて、私たちのただ中で働かれるお方です。こうしたことを考えた時に、私たちは聖書の神様を存在という次元でのみ捉えることはできないことが分かるのではないでしょうか。

出エジプト記3：14で神様がモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」

と御自分の御名を明らかにされたことから分かるように、聖書の神様はすべての存在の源であり、生きた神様として確かに存在し給う御方に他なりません。そして、神様は死んだ神様ではない、生きた神様であられるがゆえに、常に私たちの間でダイナミックに働かれるのです。

ですから、私たちは神様をただ存在としてのみ捉えるのではなくて、働きとして捉えていかなければならないと私は思います。そう思えば、なぜキリスト教に聖霊とか三位一体とかいう教義があるのかということも分かってくるような気がいたします。それは何も分かりにくい教えで私たちを混乱させようとできたものでは決してありません。そうではなく、それは神様を存在としてのみ捉えるな、ダイナミックな働きの中に神様を見ていけという教義なのではないでしょうか。

「霊(聖霊)」はヘブライ語で「ルーアハ」、ギリシア語で「プネウマ」と言いまして、これらは「息」とか「風」とかいった意味を持つ言葉に他なりません。創世記には神様が土人形の鼻にいのちの息を吹き込んで生ける人をお造りになったという記事が出てまいりますが、実に聖霊は私たちに内在し、私たちを生かす神様の命の息です。それだけでなく、神様は聖霊として、それこそ風が吹くように自由にこの世界において働かれます。さらに神様はこのように聖霊として働かれるだけでなく、父なる神として働かれる時もあれば、子なるキリストとして働かれる時もある。聖霊とか、三位一体とかいった教義は、こうした決して枠に収めることのできない非常にダイナミックな働きを為さる神様を、不可能ながらも何とか捉えて言葉で言い表そうとした教えではないかと私は思うのです。それはダイナミックな神様の活動をキリスト者が肌で感じつつ、聖書に啓示されている神様について真剣に考えていく中で生み出されていった教義に他なりません。

神様は存在としてただ「います」御方でなく、この世界でダイナミックに働いておられる御方である。であるならば、私はその働きの中に神様を見ていきたいと願います。

ご存じのように今年の１月１日に能登半島で大きな地震があり、たくさんの方々が亡くなられ、今も多くの方々が苦しみの中に置かれています。こうした大きな災害を前に、多くの人々が「神様がいらっしゃって何で？このような悲惨な出来事のどこに神様はおられるのか？」といった存在論的な問いを抱えたことでしょう。神様を存在としてのみ捉えたなら、私たちは躓きを避けられません。けれども私はこのような時だからこそ、働きの中に神様を見たいと思うのです。

このような不条理な出来事の中においても、いや不条理な出来事だからこそ、神様はダイナミックに働いておられると私は信じます。十字架の上で、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と御自身も不条理を経験されたイエス・キリストのお姿として被災地の方々に寄り添い、支え、聖霊という形で私たちの愛を喚起し、すべての命の創造主である父なる神様として亡くなられた方々と向き合い、永遠の命へと憩わせと、神様は懸命に働いておられると思うのです。

この不条理な出来事を前に、この神様と共に私たちもまた愛を持って働いていくならば、被災地の方々に寄り添っていくならば、私たちは必ずやその神様を感じることができるでしょう。東京府中教会では能登半島大地震被災地支援のための募金を既に始めましたが、これからも教区の災害担当者、また被災地の方々と連絡を密にとり、被災地のニーズを把握しながらその時々に合った息の長い支援をして参りたいと存じます。願わくは、神様が私たち教会の業を豊かに導いてくださいますように。教会の枠も超えて、皆で力を合わせて被災地を支えていきたい、そうして神様と共に皆で今回の災害を乗り越えていきたいと願います。

祈りましょう。　　――以下、祈祷――